



愛隣幼稚園.....

園だより

.....18. 3月号

自ら考え歩いていく

最近、愛隣幼稚園の職員室は、高校受験にまつわる悲喜こもごもの話題で、主に年齢高めの職員たちが盛り上がっていました。「だめでしたぁ〜。次、頑張ります！」って自分のことではありません。息子や娘たちのことです。子どもに何か事件が起こる度、親はまるで自分が当事者のような気持ちになってしまいます。子どもが喜んでいれば安心ですが、壁にぶつかり苦しんだり、悲しい思いに沈んだりしていれば、同じように悩み沈んだ気持ちになるものです。特に後者の場合には、親であってもなかなか冷静になれず、笑顔で支えてあげたいと思ってもなんだか泣けてきたりするものです。しかし親がどんなに泣いても笑っても、心配して多くのことを整え準備したとしても、現実に対し考え乗り越えていくのは、子ども自身です。親はどんなに願っても、子どもに代わってそれを乗り越えてあげることはできません。そう、親が子どもにしてやれることには限界があるのですが、そのことを実感するのは、こんな風に子どもがかなり大きくなってからのことであったりします。それで、親が代わってあげられない、手も足も出せないような事が起きた時、子どもが自分でやらなければならないことの幾つかについては知っておいてほしいと思います。

- ①何が起こったのか、それでどうなったのか、これからしなければならないことはなにか、これらのことを自分で考える。
- ②これから自分がしなければならないことや、したいことを選択肢を考えその中から1つ、状況によってはいくつかを選び、決める。これも自分で。
- ③自分が選んだ道を、自分で歩けること。歩き出す勇気をもてること。
- ④歩き出した道の先で起こることに、自分で責任を負うことができる。誰かのせいにしらない。起っていることに向き合えること。そしてまた、考えていくこと。

『考える、選ぶ、決める、挑戦する、結果に向き合いながら、また考える』これが自分でできることは、生きていく時にはどうしても必要なことです。ところがこれは、大きくなって突然できるようになることでも、成長と共にいつの間にかできるようになることでもないのです。まだそんなことを意識しない小さな頃からの小さな経験の積み重ねが大切で、愛隣の子どもたちもすでにそんなことをやっています。たんぼぼ組もしています。片付けの時間になると決まって職員室に遊びに来るたんぼぼの男の子たちがいます。「あれ？みんな片付けてるけどいいのかなぁ？」「〜（聞こえないふり）」「片付けてあつまろう、楽しいこと始まるよ！」「〜（聞こえているのかいないのか、リアクションはなし）」「自分で考えられるといいね。」その後、いつの間にか子どもたちは保育室へ帰っていきます。（もちろん、いつもそうなるわけではありませんよ。）こんな小さなことですが、自分のこととして考えて、行動を選択し、決めたことを実行し、その結果に向き合って、次にまた同じことに会った時に考えるということ、子どもたちは幼稚園ですでにしているのです。『自分たち（子どもたち）が主人公』の園生活であるために、子ども自身が考えて、子ども自身で仲間との生活を作っていくのです。この小さな経験の積み重ねが、将来、人生の岐路に立つような出来事に出会った時にも、同じように自分で考え、自分の足で立ち、歩くことに繋がっていくと考えます。私たちは子どもの人生を代わって生きることはできませんが、子どもが考える時間を保障し、考えるためのヒントを用意すること、子どもが自ら選ぶことを保障することができます。（ただし、選んだ結果について子どもが責任を負えない事柄は、ある時まで大人が判断をします。）子どもが決めて踏み出す勇気、結果に向き合う心を支えることもできます。子どもの隣にいて共に歩いていく大人には、それが求められてもいるのです。歩く道を先に整えることや、責任を代わって担う事ではありません。“誰もがその人の人生の主人公となって、自分の足で歩いていくことができるようにすること”が子育ての目標です。ふくろう組の子どもたちと共に愛隣を巣立っていく大人の皆さん、子育ての醍醐味はこれからかもしれません。笑顔でいきましょう！神様が共に歩いてくださることも忘れずにいてください。